

ズブズブ班B

ラオスにおける日常生活の成り立ちと社会的再生産

西村雄一郎（総合地球環境学研究所）・岡本耕平（名古屋大学大学院・環境学研究所）

キーワード：時間地理学・ジェンダー・子ども・環境知識獲得

Structure of daily human life and the social reproduction in Laos**Yuichiro Nishimura (Research Institute for Humanity and Nature)****Kohei Okamoto (School of environment, Nagoya University)**

Keywords: time-geography, gender, children, environmental knowledge

要旨

この研究は、地域の生態史を考える上で時間地理学視点の有効性について論じながら、ラオス農村部を中心とした近代化に伴う生活時間・空間の変化を分析する枠組みを考える。特に、この分析においては社会的再生産と日常生活の関係を明らかにすることを目的とし、ひとつには、日常生活の時空間をジェンダーの面から考えること、もうひとつには子どもの日常生活・環境知識獲得過程の変容を考えることが提示される。

1. はじめに

ラオスにおける個々人の日常生活の中で自然と社会の相互関係がどのように形成されているかを考えることは、この地域の生態史が具体的・実質的にどのように日々編まれてきたものであるかを知る上で、重要な課題といえることができる。

このような課題を明らかにする一つの視点として、時間地理学を挙げることができる。時間地理学とは、個人とそれに関わる社会・自然などの環境との関係を、時空間上での「物 (matter)」の相互作用としてとらえることが可能な枠組みである (Hagerstrand, 1970; 1989)。例えば、個人の日常生活は、自然の中の事物や社会における他者との関わりから構成される。時間地理学において、個人・自然界の事物や、社会の中の他者は、2次元上の空間軸とそれに垂直方向の時間軸を加えた時空間上の連続的位置を示す軌跡 (パス) として描くことができ、それらの相互関係は、時空間の中でのパスの結びつきとしてとらえられる。これらのパスそれ自体には、それぞれの能力に基づく制約やそれらが属する自然環境や社会制度との関わりの中で作られる制約が作用するとともに、人や事物が直接的に対峙するという相互関係を取り結ぶ上では、その相手のパスと特定の時空間上で結びつかなくてはならないという制約が働く。

このような日常生活の時空間は、様々な時間スケールの下で常に変化している。例えば自然の事物は、ある自然環境が持っている、日単位・月単位・季節単位・年単位といった規則的なリズムの制約を受けながらその活動を行っている。そうした自然の事物と関わってその個人が生活するならば（例えば生物資源を利用する狩猟・採取・農耕・漁労などの生活を行う場合）、それらの自然環境・さらにはその制約の中で活動する自然の事物のリズムを把握し、それらの制約の下で自らの活動を組み立てて行かなくてはならない。

さらに、日常生活は、時間的なリズムによってだけでなく、生活を行う空間のあり方によっても影響を受ける。例えば、自然の事物は自然環境の中でのそれぞれ特定の活動可能な場所・生態的条件と関わる生息域といった空間的な制約の中でその活動を行っている。そうした自然の事物と個人が関わるならば、自然の事物が持つこうした空間的な制約も同時に考慮してなくてはならず、自然環境がもたらす空間的な制約は個人生活にも反映されることとなる。

人間は、これらの自然環境の時間的・空間的制約と同時に、社会的組織・制度、慣習によってつくられる制約とも関わっており、しかもそれらはいくつかの時間スケールと関わりながら変化している。例えば、自然資源利用

上の慣行や制度の多くでは、さまざまな社会組織を単位として資源に対する時間・空間的アクセスの制限が行われる。また、こうした制約を与える主体・また時間的・空間的アクセス範囲は、近代化・資本主義化の中で大きく変化している。

また、自動車や動力船などより高速な移動手段の導入にみられるように、個人が持つ移動能によって、日常的に活動可能な時間・空間の範囲は変化するが、その利用可能性は、その社会全体の近代化・資本主義化のあり方と関連し、さらにはその社会の中でも階級や人種、ジェンダー、年齢などの社会的な属性と結びついた差異と関わっている。

従来、人類学・経済学・家政学など多くの分野で生活時間の調査が行われてきた。これらは、それぞれ時間を一種の資源としてとらえ、その配分を明らかにすることで、個人が生存・生活を行う上で必要なコストが計られてきた。それに対して、時間地理学的研究では、時間・空間を不可分のものとしてとらえることにより、個人生活を時間配分の問題だけでなく、時空間上の配置として取り扱うことができる。このことは日常生活が、単純な時間資源の配分の問題だけでなく、活動の順序構成・シーケンスが問題であることを示すものであり、それは個人の生活空間の構成（家庭・狩猟・採取・農耕・漁労などが行われる場所・仕事場・それ以外の社会的なアクセスが行われる場所）と不可分に結びついていることによるのである。

東南アジアの農村生活は、近年、大きく変化しつつある。都市化の進展や商品経済の浸透によって、生物資源利用や農作業の内容が変化するとともに、農業専業から就業形態が多様化した。商品作物の導入と、それにとまなう農作業の方法・技術の変化は、農作業という労働活動の時空間を変化させつつある。特に、労働活動に対して、それまでの自然的リズムの影響に加えて社会的リズムの影響が強まっていると考えられる。また、生物資源利用や農作業の変化は、その地域の自然環境そのものを改変させることで、自然資源や農地と個人との空間的アクセスそのものを変化させている。

さらに、農外就業の増加は、個人、世帯、村落社会のなかに、生活時空間の分節化（農業、農外労働、余暇など諸活動が時間的にも空間的にも分化すること）をもたらしつつあり、それは、性や年齢による活動の役割分担についての社会規範に影響を与えるものとして考えられる。こうした変化の実態を明らかにし、個人の生活と自然、社会の関係を統合的かつ動的にとらえるために、以下の2つの軸から、時間地理学の方法論を適用する。また、調査対象地域としては、特に都市化・近代化プロセスと生活時間・生活空間の変化を明らかにするためラオスの首都ビエンチャン近郊のサイタニー郡を取り上げることとしたい。

2. ラオス農村の生活時空間とジェンダー

ラオス農村における日常生活の変化をとらえる際には、先に述べたように資本主義経済化の進展による様々な種類の賃労働・自営業が増加することによって、生活時間・空間の分節化が進行するという図式を想定することができる。このことは、個人の生活時間・空間の分節化を意味しているのと同時に、世帯の構成員の間の役割分化も生じさせ、世帯構成員の間の生活空間・生活時間の分節化をも進展させるものとして考えられる。これは特に世帯内の性による役割分業の進展にみられる。多くの資本主義諸国では近代的な賃労働の進展が男女の役割分業を進めたことが明らかにされ、また近年では、社会主義経済から資本主義経済への転換を行っている国においても性別役割分業が進展していることが示されている（例えば、中国の生活時間調査の例では西村（2003））。

1997・98年にラオス全土で行われた生活時間調査によると、平均労働時間は男性で7.2時間・女性で5.7時間と1.5時間程度の男女の差異が存在する。しかも賃労働に就いている割合は男性で高く、女性で低い。それに対して、女性の割合が高い仕事は、薪集めと水くみである。家事労働時間は、男性が平均0.7時間、女性が平均3.1時間と女性の家事役割は著しく大きい。女性は、それ以外の余暇活動時間などが短い。このことは、日常生活において女性の役割が男性に比べて家事に偏ったものであり、しかもそれによってそれ以外の活動への制約が大きいことを示唆している。

このように、ラオスにおいても男女の役割分業は、進展しているものとして見なすことができよう。特にビエンチャンに隣接するサイタニー郡は、都市への労働力供給域としても、また農村で生産された物資の供給・販売においても重要な役割を持つ地域として想定され、このことが男女の職業、世帯内の性別役割分業に大きな影響を与えているものと考えられる。また、この地域で行われている大規模な開発プロジェクトの進展によって、地

域内の雇用環境が変化し、また、地域内の自然環境が改変されたり、新たなインフラストラクチャが整備されたりすることによって、賃労働や狩猟・漁労・採集などの活動や薪集めや水くみなどの活動のような、男女の役割と関わった活動の場所・時間が変化するのである。

本研究では、以上のような問題意識から、ビエンチャン近郊農村において、男女両者の生産活動、家事活動などの具体的な日常生活の観察・調査を行い、男女の役割分業の歴史的な変化とそれと結びついた生活時間・生活空間の変化の状況を明らかにする。

研究方法としては、現在の世帯内の男女に対する観察・アンケート調査などを用いて、生活時間・生活空間を明らかにするとともに、世帯の性別役割の変化についてインタビューを行う。またこれらの時空間地図の作成においては、GPS・GISなどの利用による生活時間・空間の測位を行う。

3. 子どもの日常生活と環境知識獲得過程の変容

ラオスの年少人口率（15才未満）は44%(1995年)であり、周辺国のタイ（24%、2000年）、ベトナム（40%、1992年）を上回り、世界の開発途上国全体での推計値（33%、2000年）に比べてもかなり高い（ラオスのみLCES2、その他は国連世界人口年鑑2000による）。ラオスの中でも、年少人口の割合は農村地域において高い（都市地域39%に対し農村地域45%、LECS2による）。ラオスの農村は子どもが多数を占める社会だと言える。

ラオス家計調査（LECS2:1997/98）の生活時間統計によれば、家計収入関連の労働と家事労働をあわせた1日の労働時間は、15才未満の男子で4.1時間、女子で5.6時間であり、かなり長い。さらに就学前の6歳以下の子どもでは1日の労働時間は約8時間で、大人のそれと大差ない。しかし、これは、純粋な労働というよりは、労働と遊びが不可分に結びついた活動とみなすべきであり、大人の労働時間の多くが農業および狩猟・漁労（男性5.0時間、女性3.5時間）に費やされる時間であることを考えると、子どもたちは親たちのこれらの活動に随伴し、手伝いながら、それらを遊びにもしていると考えられる。

子どもたちは、こうした労働かつ遊びを通じて、農作業や狩猟・漁労には不可欠な、環境に関する様々な知識を獲得していく。したがって、労働の場は遊びの場であるとともに教育の場でもある。子どもが環境について何を学び、遊びや労働の中でその知識をいかに使用するかは、地域社会の文化的基盤の再生産にとって鍵となる。しかし、途上国農村の社会的再生産のありかたは、Katz(1991)がスーダンで示したように、近年、外部からもたらされた社会経済的変化によって大きな影響を受けている。

ラオス農村においても、商品経済の流入や農外雇用の増大によって、生産活動と社会的再生産との結びつきは変容しつつあると考えられる。とりわけサイタニー郡のような大都市に近接した農村においては変容の程度は著しいであろう。たとえば、農業技術の変化、脱農化、雇用労働の増加などによって、子ども時代に労働を通じて獲得された知識が、成長後の労働には役立たないといった矛盾が生じている可能性がある。また、労働、遊び、教育が一体となっていた生活活動が解体し、子どもたちの生活時間と生活空間は機能別に分節化しつつあるかもしれない。そして、このような社会的再生産過程の変容は、人々の環境との関わり、環境に対する意識を変化させるであろう。

本調査では、こうした問題意識に基づき、ビエンチャン近郊農村において、生産活動と社会的再生産の結びつきとその変容の様子を、特に環境知識の獲得過程に焦点を当てながら明らかにしていく。方法としては、現在の子どもたちの生活活動、特に労働／遊び活動を観察するとともに、親世代および祖父母世代の住民に対して、彼らの子ども時代の生活活動に関してインタビューを行う。

<文献>

西村雄一郎（2003）：中国都市の職場・家庭におけるジェンダー役割と生活時間配分．東京大学人文地理学研究．16, pp. 105-119.

Hagerstrand, T. (1970): What about people in regional science? Papers and Proceedings of the Regional Science Association, 22, pp7-21. 荒井良雄・川口太郎・岡本耕平・神谷浩夫編訳（1989）：『生活の空間 都市の時間』古今書院, 5-27.

Hagerstrand,T.(1989): Reflections on 'What about people in regional science' . Papers of the Regional Science Association, 66, pp.1-6.

Katz,C.(1991): Sow what you know: The Struggle for Social Reproduction in Rural Sudan. Annals of the Association of American Geographers 81, pp.481-514

State Planning Committee National Statistical Centre(1999): The Households of Lao PDR: Social and economic indicators Lao Expenditure and Consumption Survey 1997/98(LECS2), 63p.

Summary

We argues how the life time and space connected to the concept of eco-history. Our study aims to show how the daily life of Vientiane suburban people is changing by the effect of modernization. Our main focus is to analyze the human daily life from two aspects of social reproductions, first is the gender difference of the daily activity, and second is how to children acquire the environmental knowledge. This study includes the interview and the question survey of daily activity to the residents, the collecting and mapping of the activity data by GPS-GIS technology, and using of census data (activity diary data by Lao National Statistical Center).